

# 岡山大學藏池田文庫本平家物語について

高 橋 貞 一

## 一

本書は昭和四十八年十一月より四十九年五月にかけて岡山大學池田文庫等刊行會より刊行され、岡山大學教授森岡常夫氏の解説があつて、他の諸異本との比較もあり、参考にすべき點が少くないが、平家物語の一研究者としても筆者の見解を述べるべきであると感ずるので、次に若干私見を加へたいと思ふ。筆者の諸本研究の結論が如何に實證されるかといふ點でもある。鉢裁は十二卷で十二冊であるが、各卷の性格が異つて居て、十二卷十二冊の一部でないことは先づ注意すべきである。所謂混合寫本とは異り、書寫は同一人の平假名交り書寫で、室町末期の書寫と認めて差支がないであらう。卷頭に目次があるが、本文はすべて書き續けて古い形態を保存してあるといへよう。各卷の特質は次の如くである。

## 卷一

卷一は覺一本に近い本文を有し殊に西教寺藏本に一致する語句がかなりあり、覺一本が次第に流動してゆく形態詞章を示すものである。注目すべき點を二三あげると、「すゞきせんちうへ入事」に、

きよもりのこういまだあきのかみたりしとき、いせのくにあの、つより舟にてくま野へまいられけるに、大なるすゞきの舟へをどりいつたりけるを、せんだつ申けるは、これはめでたき御事なり、いそぎまいるべしと申ければ、さしも十かいを、たもてしやうじんけつさいのみちなれども、むかししうのぶわうの舟にこそはくぎよをどり入たりければとて、てうびしてわが身くひ、いへのこらうどうどもにいたるまでみなくはせらる。(濁點及び句讀點を加ふ。以下同じ)とある。これは覺一本と殆ど同文であるが、少しく異なり、語句の順序や、「あの、津」の出てゐるのを見ても分るのである。然しなほ流布本には程遠い本文であることは注目すべきであらう。「ぎわうの事」も覺一本に殆ど一致するが、西教寺藏本に近い語句が注目され、最後に、

みなわうじやうのそくわいをとげゝるとぞきこえし。にうだうほとけをうしなひて、せんかたなくぞ見えられける。あまりにみめよかりつれば、てんぐがとりたるにこそとの給ひける。その、ちやゝありてきゝ出されたりけれども、さやうになりたらんずる物をとて、たづねられざりけり。さればごしら河のほうわうのちやうかう

だうのくはこちやうにも、ぎわうぎによほとけとぢらがそんなれうと  
四人一所に入られたり。

これは覺一本系統本の文に異文が補入せられたもので、大山寺藏本卷一、龍門文庫藏本卷一にのみ見える詞章である。八坂流系統本の先出とみるべき傳本の詞章である。屋代本にも、平家抽書七ヶ條の中にある義王義女佛閑事に、

四人尼共遂ニ往生ノ素懷ヲ遂ケルトソ聞ヘシ、入道相國佛御前ヲ失テ手ヲ分テ彼尋ケレ共無リケレハ、一定入道カ佛ハ天狗ニ被取タリトソ宣ケル、遙ニ在テ聞出サレタリケレ共、左様ニ思出テ後世ヲ厭ハン者ヲ中々兎角云ニ不及トテ其後ハ尋モ無リケリ、サレハ後白河ノ法王ノ長講堂ノ過去帳ニ義王義女佛閑等カ尊靈ト四人一所ニ入セ給ケリト聞ヘケルソ忝ナキ。

とある。百二十句本には存しない。

## 卷二

卷二卷三の目次は、卷一と異り、漢文風の題目となつて、卷一その他と異なる點がある。本文は文祿本、中院本と同系統本であるが、「鬼海嶋流人三人夏」に

一日へんしもつゆのいのちながらふべしとも見えざりけり。つゆのいのち草ばのすゑにすがりて、なをきえやらぬをおしむべきにはあらねども、たんばの少將のしうと平のさいしやうのりやうひぜんのくに、かせのしやうより、いしよくをつねにをくらければ、それにてこそしゆんくはんもやすよりもいのちをいきすぎし

とあるのは、一方流本による補入である。次に續けて、

やすよりはしゆつけゆるされしかしこまり申をくりければ、小松殿よりの御返事に、

すみぞめのころもそでときくからに

よそのたももしほりかねつ、

やさしの御返事やとて、やすよりなみだせきあへず

とあるのは、延慶本にある歌である。十二卷本にはないので、異本による補入とすべきである。又續いて、

少將とやすよりはもとよりくま野しんかうの人なりければ……（康頼祝詞）（卒都婆流）……さつまがたよりはるくゝとみやこまでつた

へけるこそふしぎなれ。あまり思ふ事はかくしるしのあるにや。

むかしかんわうこゝくをせめられるけるに、はじめりれうを大しやうぐんにて……（蘇武事）……さるほどに大なごんはあり木のべつ

しよにおはしけるが……

とある。この康頼祝詞、卒都婆流、蘇武事の三章は一方流の本文で、「さるほどに大なごんは」以下は、新大納言於配所他界事と新大納言北方出家事で、又八坂流中院本と同類本の詞章である。従つて、卷二の本來の形態はこれらの康頼祝詞、卒都婆流・蘇武の三章を除いたものと認むべく、それは中院本と同類本といふべきである。

## 卷三

卷三は、目次に、山門荒終事とするが、内容は、朝鯉行幸、山門滅亡、善光寺炎上（簡略）である。これは百二十句本と同類の性質であるが、本文はむしろ一方流本である。鬼海嶋流人赦免事には、御産事があつて、

御さん所は六はらいけ殿にてありければ、ほうわうも御幸なる。せんれいにようごきさまの御さんの時にのぞんで……

とあつて、法皇御幸の條に脱文があり、

中宮はひまなくしきらせ給ふばかりにて、御さんとはみにならざりけり。だいにより左中將やすみち、右中將みちちか、左中將たかふさ、右衛門ごんのすけつね仲、くらんど所たきぐち、をの／＼二三どはせちがひにまいりける。さんぬるゑいりやくにはかのれうの御馬たまひて、これにのる。今度はそのれいなし。てん上人などもきばにてぞありける。

とあつて、内裏よりの使者の事がある。これは盛衰記に類する。又公卿揃の條も、

不參の人々には、花山院前太政大臣忠雅、大宮大納言隆季、前大納言兼長、前治卿部光隆、左三位中將兼房、修理大夫信隆、大宮權大夫經盛、新藤三位隆輔、左三位中將隆忠、此人々後日に布衣をちやくして……。

とある。これも盛衰記と類する。白川院皇子祈事(頼豪)には、

しら河のみの御とき、きやうごくの大殿の御むすめきさきにたゝせ給ひしかば、しゆしやうのきさきのはらにわうじ御たんじやうあらまほし……。

とあつて、脱文がある。俊寛嶋留事には、

そうづの日ごろめしつかひけるわらはに、かめわうありわうとて、二人ありけるが、あけてもくれてもしうのわかれをなげきけるが、その思のつもりにや、かめわうはほどなくしにけり。

とあつて、龜王の事がある。これは屋代本、中院本などに類する所である。小松殿熊野詣事には、無文汰汰の事があつて、次に、

中にもきたのかたの御なげきたぐひすくなくぞきこえし。このきたのかたと申は、こなかのみかどの中納言いゑなりのきやうの御むすめなり……上はおもくし下をばなつかしくし給ひし人なれば、なげきかなしむもことほりなり。すべてこのおとゞはみらいの事を……

(金渡)

とある。この北方の御敷きの事は、他には靜嘉堂文庫現藏、加藤家舊藏本に見える所である。次に、

その、ち十月のころ、ちうぐうの御かたのねうぼう、う京のたいふつばね、小松殿のきたのかたの御もとへかくぞ聞えける。

かきくらす夜はの雨にもいろかはる袖の

しぐれをおもひこそやれ

とまるらんふるきまくらにちりはみては

らはぬとこをおもひやるかな

御返事

をとづるゝしぐれは袖にあらそひてなくゝあかす

よはぞかなしき

みがきにし玉の夜どこにちりつみてふる

きまくらをみるぞかなしき

とある。これは右京大夫集による補入であるが、直接右京大夫集によるか否かは明らかでない。これも靜嘉堂文庫藏の加藤家舊藏本にある。又妙音院師長琵琶引の條にも、師長が土佐國へ流された時の事を

述べて、

これはとさのはたへながされ給ふ。御ざいこくのあひだにかすかにやさしき事ども、おほかりけり。そのころしきぶのたいふみなものすけやすといふ人はるく、とたづねまいたりければ、しやうのことの水のしらべのてうしを、しへさせおはしけるに、かんにたへず、すけやす御すゞりすへられたるおじきにかきつけ給ひけり。

ことのねにいとゞたものぬれますは水

のしらべをきけばなりけり

そのときおなじくせいかいはの事共おほせられて……（中略）さく

ら人を千たびうたひまひたる花のおもかげ、びわのねなど思やるこそおもしろけれ、さて九年と申ちやうくはん二年十月十日めしがへさせ給ひて……。

とある。この異文も前記の加藤家舊藏本に存する。本書のみの特異文ではないが注目すべき記事である。従つて加藤家本との關係が先づ問題となるのである。加藤家舊藏本が、朝覬行幸、山門滅亡、善光寺炎上の次に、康頼祝詞、卒都婆流、蘇武がないのは、本書と同一であるのである。加藤家舊藏本とは極めて密接な關係にあることは否定出来ないものがある。然し本文上は相互に少し出入がある。そして他の八坂流の中院本などの卷三と類する所は、朝覬行幸の次に、山門滅亡、善光寺炎上が来る事である。これは八坂流本の根本的な性質の一であらう。然し全般として詞章は一方流の本文に近いものが多いのが卷三の特色といふべきであらう。

卷四

卷四は覺一本より流布本に至る過程の一方流の本文を有する。他の卷々と異りて、本書の成立年時を示すものであらうか。例へば、卷頭いつくしま御幸の事に、

かந்தちめちんにあつまつてふるき事共せんれいにまかせてをこなひしに、右大臣殿ちんに出て……（中略）心ある人々、なみだをながし、心をいたましめずという事なし。我と御くらゐを……（中略）をしおろされさせまし／＼けんあはれさ申も中／＼をろかなり。つたはれる御たから物……（中略）めでたきいはひの中にも、今さら

あはれにおぼえて、なみだをながし袖をぬらさぬはなかりけり。

とある。傍線を付した所は覺一本と異つて、一方流流布本の本人と一致する所である。次に、

七日いつく嶋御かうの御かどいでとて、入道相國のきたのかた二位殿のしゆく所、八條大宮へ御かうなる。その日、やがていつく嶋の御神事はじめらる。その日のくれがたにてんがよりからの御くるまうつしの馬なんどまいらせらる。あくる十八日入道相國の亭へいらせおはします。

とあり、流布本の詞章と一致する所もあるが、下村時房本などよりは、鮑汰汰、長兵衛修連合戦之事の如く覺一本に近い所が多く、従つて室町中期頃まで遡り得る本文であらうか。

卷五

卷五も、覺一本よりも、流布本に近い本文を有する。例へば、都遷之事に、

太政大臣以下のけいしやううんかく我も／＼とぐぶせらる。平家太

政入道をはじめて一門の人々みなまいられけり。三日福原へいらせ給ふ。入道相國の御おとゝ、いけの中納言よりもりのきやうさんごうくはうきよになる。

とあり、右の傍線を付した所は、流布本に略一致して覺一本と異なる所である。物のけさばかりの事は、略覺一本に近く、大(場)早馬之事にも、

入道相國いかられけるやうなめならず、なかにつきかのよりともはさんぬる平治ぐわん年十二月ち、よしともがむほんによつて、すでにちうせらるべかりしが、いけのぜんにのあながちになげきの給ひしかば、るざいに申なだめられたり。しかるにそのをんをわすれて、外人もなきところにたうけにむかつてゆみをひき、矢をはなつにこそあんなれ。

とある。これも傍線を付した所は、覺一本と異りて、流布本に一致する所である。

福原鎌倉院宣事にも、

ひやうゑのすけ殿の給ひけるは、そも／＼よりともちよつかんをゆりずしては、いかでかむほんをばをこそすべきとの給へば、もんがくそれやすいほどの事なり。やがてのぼつて申ゆるしたてまつらん。ひやうゑのすけ殿わらつて、わが身もちよくかんの身でありながら人の事申さうとの給ふひじりの御ばうのあてがひやうこそ大にまことしからねとの給へば、もんがく大にいかつて、わが身のとがをゆりうと申さばこそひが事ならめ、わどのゝ事申さうは、なじかはひが事ならん。今のみやこ福原のしんとへのふらふに三日にすぐまじ

おんせんうかゞふに一日のとうりうぞあらんずらん、つがう七日八日にはすぐまじとてつき出ぬ。

これも同じく傍線を付した所は流布本に一致する本文である。卷四と同性質の卷である。

#### 卷六

卷六の巻頭、高倉院崩御事の中、初音僧正の事は、記事の順序が覺一本に同じで、流布本よりは古い形態といふべきであるが、太政入道死去事に、

二月二日の日、二位殿あつきたへがたけれ共、入道相國の御まくらによつて、御ありさま見たてまつるに、日にそへてたのみすくなうこそみえさせおはしませ。物のすこしおぼえさせ給ふとき、おぼしめしをく事あらばおほせられをけとの給ひける。入道相國日ごろはさしもゆゝしげに、おはせしか共、よにもくるしげにて、いきのしたにの給ひけるは、たうけはほうげん……(中略)かたじけなくも、

一天の君の御ぐわいせきにて丞相のくらゐにいたり、ゑいぐはすでにしそんにをよぶ。こんじやうのゝぞみは一事も思をく事なし、たゞし思をく事とは、伊豆國の人、さきのひやうゑのすけよりともがかうべをつみに見ざりつる事こそやすからねわいかにもなりなんのち、ぶつじけうやうをもし、だうたうをも立べからず、いそぎうつ手をくだし、よりともがかうべをはねて、わがつかの前にかくべし、それぞわが思ふ事との給ひけるこそおそろけれ。

とある。傍線を付した所は覺一本と異り流布本に一致する所である。

又兵庫筑嶋事にも、慈心坊の條、

御ぼう一人たきる事いかん、こしやうのざいしやうたづね申さんためなり。ゑんわう、わうじやう、ふわうじやうは人のしんふしんにありとうんく。ゑんわう又みやうくはんにちよくしてのたまはく、此ぼうのざぜんふばこなんばうのほうぎうにあり……

きよもりこうをば、じゑそうじやうのけしんとは人みなしりてけり。ちきやう上人と申は、こうばう大しのさいたん、しら川のみんは又ちきやう上人のけしんなり。此君はくどくの林をなし、ぜんごんのとくを重させおはします。まつだいにきよもりこうあくこうもぜんごんもともにこうをつんで、世の人のため、じたのりやくをなすとみえたり。だつたとしやくそんと同じゆじやうのりやくにことならず。

とあり、前半は覺一本に近く、後半は流布本に近い本文である。目錄には、山陰中將事があるが、本文になくて流布本に同じく、邦綱卿逝去の條は、

入道相國とさしもちぎりふかうおはせしが、同日にやまひつきて、同月にぞうせられける。同廿二日さきの大將むねもりのきやうみんざんして、みんの御所ほうぢう寺へ御かうなしまいらすべきよしそうもんせられけり。

とある。この詞章も、傍線を付した所は流布本と一致する。卷末に近く、

同十七日、よろこび申ありしに、くぎやうには、くはざんのみんの中納言をはじめたてまで、十二人こせうしてやりつづけらる。くら

んどのかみちかむねいげ、てん上人十六人ぜんくうす、中納言四人三位中將も三人までおはしき。源氏すではちのごとくに起あひ、たゞ今都へみだれいらんとするに、なみのたつやらん風のふくやらんも、しらぬていにて、はなやかなりし事共、申くいふかひなうぞみえし。

これも又前の詞章と同じく流布本に近い詞章である。以上の例によつても明らかなる如く、卷六も覺一本より流布本に至る過程の詞章を有し覺一本に近い、流布本成立以前の一方流傳本の一つである。

## 卷七

卷七の卷頭、清水冠者事は、他の十二卷本の傳本と全く異り、清水冠者の後に、

すけ殿此上はとてひつかへす。是もさしもなかりける事を、かひ源氏いさは五郎のふみつが木そちやくし、し水くはんじやよししけをむこにとらんとひけるを、木曾もちいざりければ、ほいなき事に思て、木曾こそすでにむほんをくはだて、すけ殿をうちたてまつりて、我ひとり世をとらんとはからひ候なれ。うちとけさせ給ふまじと、兵衛のすけ殿にざんげんしたりけるとぞのちにはきこえし。

とある。これは長門本平家物語卷十三、盛衰記卷二十八、延慶本卷三末にも同様な記事があるので、増補せられた傳本によつたものであらう。恐らく盛衰記によつたものであらう。次の章の竹生嶋詣事以下は、八坂流乙類本の中院本と殆ど同文である。木曾願書の事、願書の前に、

此かくめいと申は、もとじゆけのものなり。くはんがくみんにしん

じくらんどみつひろとて候けるが、しゆつけしてさいじようぼうしんきうとて、しばらくなんとに候けるが、たかくらの宮の三井寺へおちさせ給て、てうじやうをくられたりしへんてうをも、此かくめいぞかきたりける。きよもり入道はへいしのさうかう、ぶけのちんかいとかきたりけるを、入道大にいかつて、しんきうぼつしがかうべをはねんとの給ふあひだ、なんとをしのびつゝまぎれ出、ほつくにおちくだりて候けるが、木そにつきてはかいみやうして、大夫ぼうかくめいとぞ申ける、かゝりしさい人なりければ、なじかはかきもそんずべき。心もをよばずどかきたりける。

とある。中院本に同じく、文祿本にはない。義仲山門牒狀事、牒狀の始めに、

源義仲謹言上、欲令殊蒙合力停止平家惡逆事

の語がある。他の十二卷本になく、盛衰記卷三十の牒狀に、「源義仲謹言、奉親王宣欲令停止平家惡逆事」とあるによつたものであらう。長門本も同文がある。又山門返牒の始めに、

延曆寺大衆等謹御書狀一通被載速翻平家値遇僉議、可致源氏安穩御祈由子細狀

とあるが、これは他の傳本にはなく本書の特異な語である。平家連署事に、平家の人々の連署があつて、次に、

てんだいぎすめいうんそうじやう是をあはれみ給て、かのぐはん書を十ぜんじの御てんにこめて、七日きせいせられけるに、ふしぎなりし事は、かゝれたり共おぼえぬ一しゆの歌ぞありける、  
たいらかに花さくやども年ふればにしへ

かたぶく月とこそ見れ

まことにたゞ事とはおぼえず。さんわうの御ゑいかとぞ申ける。是をきく人したしきもうときも、心あるも心なきも、みななみだをながし袖をしぼらぬはなかりけれ共、年ごろ日ごろのふるまひしんりよにもたがひ……。

とあり、他の諸本と異り、大略中院本に近いが、八坂流乙類本の文祿本とは大いに異なる所がある。本文の記事の順序は、

○一方流本      ○八坂流本（中院本）

主上都落      主上都落

攝政都留      攝政都留

維盛都落      維盛都落

聖主臨幸      池大納言都留

東國大名      經正都落

忠度都落      青山沙汰

經正都落      忠度都落

青山沙汰      聖主臨幸

池大納言都留      東國大名

一門都落      一門都落

福原落      福原落

とあつて、本書は中院本と同類である。福原落事には、經正の歌として、

みゆきするすゑも都と思へどもなほなぐさまぬなみの上かな  
があるのも、八坂流本の特質である。中院本の同類と認めて差支のな

い傳本である。

### 卷八

この卷は平家物語のすべての傳本中での特異な傳本といふべきである。以下少し煩雜ではあるがこの卷の成立を考究してゆきたい。目錄も他本と異なるものがあるので、本書の目錄によらず記事内容によって進めてゆくこととする。

法皇還御（叡山より）は、一方流本に近い本文で、記事が簡略である。次に行家義仲都入以下四宮即位に至る文は、略長門本（延慶本）に一致して、一方流本八坂流本と異なる詞章である。

さるほどにその日のたつの時ばかりに十郎くらんどゆきいへいがの國よりうちこはたをへて京へ入ぬ、そのせい一萬よきとぞきこえし。つがう六萬よき都へ入しかば、在々所々をついぶくし、人のいしやうをはぎとり食物などをうばひとりけるうへ、らく中のらうぜきなめならず。廿九日よしなかくきいゑ院の御所へめされて、べつたうさゑもんのかみさねいゑのきやう、とうのべんかねみつにおほせて、さきの内大臣いげ平氏の一るいをついばつすべきよしめしおほす。十郎くらんどはかちんのひたゝれにくろかはおどしのよろひきて右に候す。木そよしなかはあかぢのにしきのひたゝれにからあやおどしのよろひきて左に候。木そ御返事をば申ける。をのく宿所なきよしを申ければ……新主を立たてまつるべきよし殿上にてくぎやうせんぎあり。

とある。一方流本にある紀伊守範光の歌なし。惟喬惟仁親王位諱事は、一方流覺一本に近い本文であるが、時忠の批判の語は此處にな

い。次に源氏受領の事があるが、一方流・八坂流本にはなく、これも長門本（延慶本）に近い語である。次に平家太宰府着安樂寺詣事がある。本文は一方流本に近いが、一方流本（の記事の順序）は、惟喬惟仁親王位諱事の前に述べてゐる。次に四宮即位に就いての平家の人々の批判がある。一方流本は前述の時忠の批判である。天武、孝謙天皇の例などを引いて還俗の宮の即位を述べてゐる。次の宇佐行幸事は、長門本に近く、「世の中のうさには神もなき物を心づくしになにのらん」の歌のみがある。太宰府還御、九月十三夜の事は、一方流覺一本に類し、刑部卿頼輔下知事は、長門本に近く、緒方惟義先祖事は一方流本に類する。太宰府落事も略一方流本に近く、一部長門本に類する所がある。在中將清經入水事は、

小松殿の三なん左中將きよつねあそんは、都をは源氏がためにおとされ、ちんぜいをばこれよしにをひ出され、いづくへのがるべきかとて、月の夜心をすましやうちやうねとりらうゑいして、なぐさみ給が、しづかに經よみねんぶつして、うみにぞしづみ給ける。なんによなきかなしみ給けれ共かひぞなき、

は一方流本の本文であるが、次に、清經の北の方の歎きの事がある。中院本、文祿本など八坂流本にもあるが極めて簡略であるのに本書は長文である。

此中將の北方はれんぜいの大納言たかふさの卿の御むすめ、中將十六北方十三より見そめて今年は六年にぞ成にける。見そめ給したより今にかぎりの朝までいつも其夜のこゝ地してたがひの心あさからず。されば都をおち給しにも引具したてまつらんとたまひしが、



人々具し給へ共、あにのこれもりいげ、きやうだいさも仰ぬ上、行末も又ぐんちんなれば、心ぐるしくこそあらんずらめとて、千たび心をいましめとゞめをき給にけり。我うたれたると聞給はゞ、是をかたみに御らんぜよとて、びんのかみを一ふさきりてをかれたりけり。いとまこひて打出給しおもかげは、いつわすれぬべしとおおぼえず、やがて引かづきてふし給ふ。日にそへてたのみすくなくみえ給へば、めのとのねうばう、もしやなぐさみ給ふとて、かたみのかみを取り出してみせたてまつれ共、思はいとゞかずそひてなげきは日にぞまさりける。今はかぎりと思はれけん、御すゞりこひ筆のたてどもおぼえね共、思ひし事共かきつゝ、おくには歌ぞ有ける、

見るたびに心づくしのかみなればうさに

ぞかへすものやしちへ

我きえなんのちは是をかならずつくしへたてまつれとめのとのねうばうにいひをきつゝ、さんぬる七月廿五日わかれたてまつりてのちなげきしづみて、同八月七日御年十八にてつゐにはかなくなり給ぬ。はゝ上ちゝの卿いかにせんとかなしみ給ふ……。

とある。他の傳本に見えぬもので、解説にもある如く本書の特異な性格であらう。

次に屋嶋内裏造營事は長門本に近く、阿波民部なりよしが遠見を置いた事は一方流本八坂流本になく長門本にある語である。

なみの上の行宮なればしづかなる時もなし、月をひたすうしほ……

(中略) あし火たく屋のあり様こそまことにものうく思はれけめ。

は大略一方流本に類し、次に、

岡山大學藏池田文庫本平家物語について

平中納言のりもりの卿かくぞすさみ給ける

すみなれし都のかたはよそながら袖になみうちいその松風

とある。他本にはない。征夷將軍宣旨事に、

よしずみはかちんのひたゝれにえびらおひ、ぬり、こめ、どうの、ゆみに、いか物づくりの太刀はいて、弓をばわきにはさみ、右のひざをつき、せんじぶくろをうけとりけり。

とある。この三浦義澄の條は、傍線を付した所は一方流本に類し、傍點の所は八坂流本に類し、又、長門本にも類する所もある。混合本文としての適例の一つである。又宣旨の文も、長門本、延慶本、盛衰記にあるもので、本書には脱字がある。次に、中原泰定と頼朝の對話の條に、

頼朝が書狀には十郎藏人と本そのくはんじやとかきて候しか共、返事をばしてこそ候へとの給ふところに、おりふし聞書たうらいの事あり、兵衛佐是を見て大に心えずげ也。長茂がゑちこのかみになされ、高よしがひたちのかみになりて候事いかに、ひでひらがみちのくのかみになりて候とて、頼朝がめいにしたがひ候はず、きくはいにおぼえ候なり。ついたうせよといふあんぜんを下さるべしやらんと申さる。やすさだ名符をたてまつるべく候へ共……

とある條は、他本と異なり、又、

兵衛佐のたちへむかふ。こがねづくりの太刀に九さしたるの矢具して給。にかけだ三十疋、家の子らうどうにいたるまで小袖ひたゝれ馬くらにをよぶまでたびにけり。

とある。傍線を付した時は長門本に類する所である。次に、

やすさだ御所へまいり、御つぼねにてくはんとうのしだい一々にそうしければ、ほうわうも御かんありけり。くぎやうてん上人もみなけうに入給けり。八嶋にはあはのみんぶなりよし四國をもよほしかたのごとくいた屋のだいたりや御所をつくり出す。そのしやうにあはのかみにぞなされける。人々なりよしがめいにたがはじとぞふるまひける。木そよし仲都へのぼり、平家をばをひおとしたりけれ共、あくぎやうはなをまさりて、都のらうぜきしづまらず、てんせい木曾は心もかうにゆみとりてもよかりけり。たけたかく事がらゆゝしかりけれ共、立みのふるまひ、物などいへば、ことばつかひなど、けんごのみなかうどにて、あさましくおかしかりける。

とある。傍線を付した所は他本になく、傍點を付した所は、長門本に類する語である。長門本の語と類する所は本書には極めて多く注目すべき現象である。次に、描間の事は、一方流本に近く、水嶋合戦事も、略一方流本に類するが、妹尾最後事は記事の順序が一方流本と異なる所がある。室山合戦事には、

十郎藏人せめ入てたゝかひけり。一陣のせいはをふせぐ。しばらくさゝへてゆんでの木かけへなだれにけり。二陣にむかふ。此手もふせぐやうにてめてのかたへ引しりぞく。そこをとして三陣につく。是もこらへずきたのふもとへおとさる。四陣よりあふ。同みなみのふもとへおちにけり。五陣の大勢によりあひたり。新中納言のさぶらひ、喜七喜八九郎きやうだい三人をさきとして、せいびやうの手きゝ共をそろへていさせ、やぶるべきやうもなくてとつてかへせば、平家時をつくりてをつかく。時の聲を聞て、四方の兵共み

ねにのぼりたにゝくだり道をふさぎて待ければ、行家かたきにたばかられにけりと心得て、かたきをいんともせず、行家につゞいてとをれもの共とて、ゆみをわきにはさみ太刀をかたにかけてつとをる。四陣をやぶりて三ちんにつく……。

とある。これも長門本に類する。一方流本、八坂流本と全く異なる所である。次に、鼓判官の事（木曾於京都任雅意事）には、

をよそ北國の源氏都へみだれ入てのちは、……人のつちくらをうちやぶりと、ざいほうをうばいとり、いしやうをはぎとり、はしを立てしよくせんとする物をうばひとりて、口をむなしくするものもあり、はてにはだうたうをこぼちやき、佛經所をゝかす、大路にはむしやのある所もなき所にも、しらはた打立ゝ、とをるもの共のいしやうをはぎ、しざいをうばひ、らうぜきなめならず、平家のときは六はら殿のあたりといひしかば、大かたおそろしかりしばらくなり。かやうに目をあはせて食物いしやうをとる事やありして、平家に源氏かへをとりしたりとぞ申合ける。何ものゝしわざにかありけん、ほうわうの御事を申たつとおぼしくて、院の御所のまへにふだをかきてぞ立たりける。

あかさいてしらたなごひにとりかへて

かしらにまける小入道かな

らうぜきほうにすぎにければ、ほうわうより木そがもとへほくめん候壹岐判官智康を御使にてらうぜきちやうじすべきよし仰下されけり。

とある。これも長門本に類する語である。然し長門本のまゝではな

く、今井樋口が木曾を諫める條は、長門本は詳細であるが本書は簡略である。

ともやす申けるは、むかしはせんじをむかひてよむかたは、……ぬかんつるぎはかへりて我身をきるべし、此方よりはなたん矢はなんちらがよろひかぶとはだんしうすやうにもをとるべしとぞ申ける。

とあつて十二巻本の詞章があくまで主たる性質である。法住寺合戦の章には、長門本に類する語が多い。例へば、

法住寺殿の北のざいけに火をかけたれば、いぬみの風はげしく吹て、みやうくは御所へをしかけたり。

とか、

八條の末をば楯の六郎ちかたゞせめやぶりて入けり。

とか、

御所がたにもよきものはうちじにしけり。出羽判官光長、はうきのかみに成たりける、しそく左衛門尉光經がけんびいしに成たりけるが、父子かけ出てうちじにしけり。

とあるのも、長門本に類する語である。以下の記事は、村上判官代討死を述べ、次に明雲死去、寺長吏圓慶法親死去事は、

天台座主めいんは、御所を出て御馬にたてまつらんとし給けるが、たての六郎ちかたゞがはなつ矢にこしのほねをいすへられて御くびとられさせ給にけり。寺の長吏八條の宮も小家ににげ入給けるを、ねの井の小彌太うちふせたてまつりて御くびとりたてまつる。

とあり、長門本に類する所がある。法皇の御輿にての御退出があり、

はりまの中將まさかたは弓のじやうずにておはしけるが、火すでにかゝりければ、てん上の西小侍より出てつま戸をひらき出んとし給ふを、たての六郎ちかたゞよ引てくびのほねをいんとはなつ。矢が少あがりてゑぼしをいけつりとびらにぞ立たりける。少もさはがず。是ははりまの中將まさかたといふ者ぞ。あやまちすなどの給へば、いけどりにしていましめたてまつる。

ゑちぜんのかみ信行といふ人、さぶらひさうしき有けれ共、みなおちうせぬ、火はをしかけたり。ほいにくゝりおろしてはしり出られけるを、うしろより前へいとをされて、うつぶしにふされにけり。あふみのかみ爲清もいころされぬ。もんどのかみちかなりといふ人あり。かりぎぬの下にはらまきをきて、あしげなる馬にのりて六でうを西へはせわたりけるを、いま井の四郎兼平めてのわきをあなたへいとをす。馬よりさかさまにおちぬ。今井が下人よつてくびをとりてけり。是は清大外記頼業が子也。

これらの記事も一方流本と異りて、長門本に類する所である。次に、刑部卿頼輔（こじうとにゑちぜんのほつけう正久といふ人ありけり……）正久が坊は六條あぶらのこうちにて有ければ……）藏人大夫仲兼、加賀房、信濃十郎頼道、河内守藏人大夫、主上御退出の記事がある。一方流本と異なる順序である。木曾振舞共可咲事には、木曾の意見に反対するのは「らうどう共、藤原氏のほかは關白にならぬといひければ」とある如く、今井兼平ではなく、官内判官公朝が鎌倉下向の途中にて、義經と面會する事もなく、一方流本と異なる所がある。小異をあげれば多數にわたるが、一方流本、八坂流本と異りて、長門本と一致す

る所がかなり存するのがこの巻の特質で、恐らく一方流本を主本文として長門本などを以て補訂せられたものと認むべきであらうか。

# 卷九

卷九は大略中院本と同文であるが、異なる所が若干ある。例へば、木曾討死事、巴の別離を述べて、

ともへが其日のしやうぞくには、ねりぬきに梅のたちえぬひたるひたゝれに、ひおどしのよろひをき、くはがたうつたるほしじろのかぶとをき、こがねづくりの太刀をはき、廿四さしたるきりうの矢おひ、しげどうのゆみをもち、れんぜんあしげなる馬にのりたるを見、をん田さしうつぶいて見けるに、うすけしやうにかねくろなり、をん田さればこそとて、ゆんでのかたをうちすぐるやうにもてなし、しらあしげなる馬にしろふくりんのくらをきてぞのりたりける、是やそなるらんと思ひて、つとよりてむずとくむ。

とある。傍線を付した所は中院本と異なる所である。巴の装束についての記事は、覺一本以下一方流本、百二十句本等にもなく、中院本には、ともへがその日のしやうぞくには、ねりぬきにむめのたちえぬひたるひたゝれに、ひをどしのよろひをきて、白あしげなる馬にしろふくりんのくらをきてぞのりたりける、これやそなるらんとおもひて、さしうつぶいて見れば、かねぐろにうすけしやうをぞしたりけるが、これはそなりけりと見なして、ゆみてのかたをうちすぐるやうにもてなして、つとよてむずとくむ。

とある。これに増補したものと認むべきであらう。本書は巴の乗った馬が重出して矛盾がある。

たゞおちよとの給ひければ、ともへなみだをゝさへ申けるは、こそしなを出てよりこのかた、大小事のかつせんにあふ事廿一度へんしもはなれまいらする事もさぶらはざりしか共、今御さいごを見すて、いづかたへかおち行べし共おぼえさぶらはずとて、さしもかうなるともへもすゝむなみだはせきあへず、木曾殿なんちが心ざしのほど返々しんべうなり、たゞいづかたへもおちゆくべしとの給ひければ、ともへ又申けるは、あはれたかきもいやしきも、女の身ほどくちおしかりける事はなし、我心にまかせたるうき身ならば、何しにまつさきかけてうちじにせではあるべきにと、いよゝなみだにむせびけり。木曾殿いまはどうゝとの給へば、ともへちからをよばであはずのこくぶん寺のみだうのまへにて、ものゝぐしづかにぬぎをき……。

とある所も中院本にない所がある。一谷合戦事にも、源平兩方のつはもの共、いづれせうれつあり共見えざりけり。源氏のかたの江戸四郎のふしげ、じやうの内にみかたありともしらずして、とを矢をよつびいていたりければ、はゝかたのをぢ、藤田三郎(たいふ)ゆきやすがあまりにふか入してたゝかひける(が)うちかぶとをしたゝかにいさせて馬よりまさかさまにどうどおつ。あはのみんぶしげよしがおとゝ、さくらばさまのすけよしとおち合て、藤田がくびをばとりてんげり。源氏大手ばかりにては、いかにもかなふまじかりけるに……。

とあつて、藤田三郎の事は一方流本にはなく、中院本にある記事である。忠度最後事の次に、ひぢや五郎の事がある。これも中院本に同じ

く、一方流本にはない。卷末の小宰相殿身投給事は、最後のあたりは中院本とやや異り、

三位かたじけなくもようみんよりたまはらせ給ひて、なのめならずもてなされけるに、又小松殿の二なん新三位の中將すけもりのきやうの、いまだそのころ少將にて、せちゑにまいりたりけるが、此ねうぼうを一め見そめたてまつりて、思ひに心をそめ歌をよみ文をつくし、年月こひかなしまれけれ共、なびくけしきもなかりしに、はや越ぜんの三位のうへになれぬときこえしかば、すけもりのきたのかた、う京のつばねとて、ちうぐうの御かたにさぶらはれけるが、そねましき心にや、一しゆの歌をぞをくられける、

いかばかり君なげくらん心そめし

山のもみちを人におられて

すけもりの返事には、

何とげに人のおりてしもみちばに心う

づして思ひそめけむ

是も中／＼ゆうにやさしきためしにぞ申つたへたる。みめはさいはひの花なれば、三位かたじけなくもねうみんよりたまはらせ給ひて、こんどさいかいのたびのそらまでひきぐしたてまつて、ひとつ道にをもむかれけるこそあはれなれ。

とある。この右京大夫集による増補は、如白本（彰考館文庫藏）など八坂流内類本にあるもので、他に加藤家舊藏本（静嘉堂松井文庫藏）や南部本にもあり、本書が他の異本によりて増訂されたことは明らかである。又本文中、中院本に比して小さい誤脱が幾つかある。例へば、一

谷合戦事に、

まして御馬にては思ひもよらぬ御事候と申。御ざうし、せけんだにあたゝかになり候へば……。

の如きものである。

#### 卷十

この卷は、中院本と同文であるといへよう。本書にも誤脱があり、中院本と相補つてよりよき本文が認められる点もある。中院本に存する宗論はない。

#### 卷十一

この卷も中院本と略同文といふべきものである。中院本と異なる所は次の記事である。判官義経責八嶋事に、観音講の事がある。中院本にはなく、東寺執行本（彰考館文庫藏）と一致する詞章を有する。八坂本（國民文庫所収の平家物語）などは簡略である。二位殿以下沈海事に、なみの下なるだいりへ、御かうなし奉らんずる也と申させ給へば、せんてい、二位殿の御かほを、つくぐとまもらせ給て、かくなん、

今ぞきくみもすそ河のながれまでなみの

そこにも都ありとは

と仰らるゝ御ことばいまだをはりたまはざるに、此世はものうきさかひにて……。

とあるが、この記事は中院本にない。歌は、長門本、延慶本、盛衰記に存する。前後は中院本の本文と同一であるので、他の異本による増補と認むべきであらう。三種御寶物奉渡事にも、源八廣綱の歸洛の記

事があつて、

やがて兵衛尉にぞめし仰らる。ひろつなかしこまりて申けるは、さ  
んぬる三月廿四日に、長門國だんのうら、あかまがせき、ぶぜんの  
國田うら、もじがせきのさかひにてせめおとし給候。三しゆのしん  
ぎの内、ほうけんはうせさせ給ぬ。しんじ、内侍所しるしの御はこ  
歸入たてまつらんずるよしをぞそうしける。ほうわう、御ふしんさ  
んぜられんために、ほくめんの下らう、宗判官のふもりをつかはさ  
る。

とある。この記述も、廣綱奏上の條は中院本にはない。一方流本によ  
つて補入したと認められる。次に、劍卷にあたる所の前半は、中院本  
の詞章と異りて、東寺執行本と一致するものである。

そもく此ほうけんと申は、むかし神代よりつたはれる三のれいけ  
んあり。あまのむら雲のけん、天羽々斬劍、十束の劍、是也。天羽  
々斬劍は、をはりの國あつ田のやしろにこめられぬ。十束劍はやま  
との國ふるのやしろにありとかや。中にもあまのむら雲の劍と申  
は、むかしすさのをのみこと、天照太神にながされまいらせ給  
て、いづもの國はに田のこほりやなひ田のむら、そがの郷にて年月  
ををくらせ給しに、其國ひの河上に尾かしらともに八ある大じやあ  
り。八のみね八のたに、はひひろまれり。身にはこけむしてせなか  
にはもろくの大なる木おひたり。年く人にをのむ。おやのまれ  
て子かなしみ子のまれておやなげく。村南村北にくくすることたえ  
ず。あるもの、女子一人もちたり。いな田ひめとぞ申ける。大じや  
かれをのまんとてつねにどくきをきほひをかしければ、父母是をな

げきけるを、みことき、給ひて、そのひめ我にあたへよ。しからば  
いのちたすけんと給ひければ、父母よろこびて、よろしくみこと  
の御はからひなるべしとぞ申ける。みことかれをあはれてみて、大  
じやをほろばさんはかりごとに、八の舟にさけをたへ、いな田ひ  
めをたかきをかに立て、かげをうつされたり。大じやかれをのま  
んとて、八のかしらをさけにひで、のむ間、大じやふてふしたりけ  
るを、みことはき給へる十づかのけんにて、大じやをづたくにき  
らせ給けるに、一の尾かたきてきられざりければ、みことあやし  
みてわりて見給ふに、劍あり。是を天照太神にまいらせさせ給てぞ、  
御中なをらせ給ける。天照太神仰の有けるは、此劍はむかし我たか  
まの原よりみの、國伊ぶきがたけをとをりし時、おとしたりし劍な  
りとぞ仰ける、みの、國にいは、れ給ふ伊吹大明神是也。此大じや  
のすみける所には、つねに雲たなびきて雨しげかりけるによつて、  
あまのむら雲のけんと名づけられたり。其國にはつねは八色の雲の  
立ければ、みこと、

八雲たついつもやへがきつまごめにやへ

がきつくるそのやへがきを

とよみ給へりしゆへこそ、和歌を三十一字つらぬる事もいづもと名  
づけしも此時よりはじまりけり。其後だいにとまりて代々百王  
の御たからとなれり。にんわう第九代のみかど、開化天皇の御宇ま  
ではだいにわたらせ給しを、第十代のみかど……。

とある。その他は、中院本に比して少しく脱文があるに過ぎない。

卷十二について見るに、中院本と同類であるが、若干差異がある。

その一は、三河守最後の條で、

かまくら殿、うつてをのぼせられけり、三百よきのせいをそろへて、おとゝ三河守をよび奉り、御へん都へのぼつて、九郎うち給へとの給ひければ、かしこまつて承候ぬとて、御前を立、其後御いとま申にまいられたり、三河守は大庭にたゝれたり、かまくら殿は、みすの内より見出し、御へんも二のまひし給ふなどの給へば、あしかりなるとや思はれけん、まつたくやしんをさしはさむべからずと、まい日七まいのきしやうもんをかき……。

とある。傍線を付した所が中院本と異なる。

その二は、女院御崩御の條に、

女院はいよゝ御念佛をこたらせ給はずして、つみにりうによがしやうがくのあとをゝひ、いだいけぶにんの、わうじやうをとまなはせ給ひけるとぞうけたまはる、あはれなりし御事也（中院本同じ）とあつて、次に、

そもゝだんのうらにていけどられたる人々は、大路をわたしかうべをはねらるゝもあり、……（中略）げんきう二年二月中じゆんに、つみにりうによがしやうかくの跡をゝひ、いだいけぶにんのわうじやうをとまなはせ給けり、こうきう御くらみより、へんしもはなれまいらせずして候なれたりしかば、御わかれのかなしみやるかたなくぞおぼゆる、このねうばうたち、むかしの草のゆかりもかれはてゝ、よるかたなき身なれども、おりゝの御仏事いとなみ給ふぞあはれなる、かみは玉のみすの内より、風しづかなる家もなく、下は

しばのとぼそのもとまでも、ちりおさまれるやどもなし、やしなひたてしおやと子も、行かたしらずわかれにたり、まくらをならべしいもせも雲井のよそになりはつる。

とある。これは一方流の詞章と認むべきもので、その順序も、傍線を付した所は、一方流本には女院御崩御の前にある記事である。覺一本に近い本文といふべきであらう。この記事によつて、本書は建禮門院の崩御が重出してゐる。

その三は、この建禮門院御崩御の事の次に、源頼朝上洛事が來て、六代御前出家がその次に來る。中院本とは順序が逆である。然しその詞章は殆ど差がない。最後に全般として、中院本に比してかなり脱文がある。土佐房上洛并被切事に、

○六條ほり川の判官のたちへをしよせ時をつくる、判官よろひとつてき給へば……。

○夜うちにてもひるうちにても義經を手ごめにしつべきものはおぼえぬものを……。

○すゝきをはじめとしてきやうのつはもの甘よ人かちむしやにて……。

行家失事に、

○かうちの長野のじやうへおもむきけり、しやうめいちからをよばず有けるところに……。

六代之事に、

○若君の母上、めのとのねうばうたちは、むなしきあとにとゝまつて、何とかせんともだへこがれ給ふ、此若君おひたつまゝに……。

文學關東下向事に、

○小松殿の若君たづね出し、うしなふべきよし度々仰うけ給候、さまざまにたづね出し奉りて候、あまりにみめかたちつくしく……。

などかなり多い。

以上各巻の特質と他の傳本との關係を述べたのであるが、これを總括すれば、一方流本文と認むべき巻は、卷一、卷三、卷四、卷五、卷六の五巻で、卷二、卷七、卷九、卷十、卷十一、卷十二の六巻は略中院本と同文か、又は同類本である。一方流本に屬する巻々は、卷一が覺一本系統本に最も近く、他の巻々も覺一本より流布本に至る過程にある本文とは云へ、卷四、卷五、卷六も覺一本に近い本文である。卷二以下の六巻は中院本と同文又は同系統本と認められ、これに他の長門本や一方流本が補訂せられた本文を有し、筆者のいふ八坂流乙類本の性格を示すもので、百二十句本、屋代本などの八坂流甲類本よりは後出の本文と斷定せざるを得ないのである。本書の卷八のみは他に類を見ないもので、四部合戦狀本の如く、混合本文を有する特異な傳本である。平家物語諸傳本の研究が極めて困難なことは、この様な巻の存在すること、他の文學作品には到底想像も及ばぬ所である。これは他の平安文學作品などで、傳本の系統を分類して前後を示し、第何種といった分類が行ひ難い所以である。今日筆者の分類（平家物語諸本の研究）と異り、系統表を作製せんとする者もあるが、異本群を以て分類する筆者の考が益々妥當な方法ではないかと思ふ。又他の學者たちが平曲を重じながら、平曲の流傳を考慮しない分類をしてゐるのも筆

者の遺憾とする所である。